Svetlana Boym
The Future of Nostalgia
Basic Books, 2001, 404pp+xix

守屋　愛

本書と出会ったとき，この『ノスタルジアの未来』という表題にとても惹かれた。ノスタルジアという言葉が示すのは過去の方向であるにもかかわらず，その未来という題名がついている。ノスタルジアといえば，まずタルコフスキーの代表的な映画を思い出す人も多いだろう。手近な辞書をめくってみると，この言葉は元来医学用語の「郷愁病」のことを指していたが，これが一般化して郷愁やホームシック，ノスタルジーと言われているとある。著者のスヴェトラーナ・ボイムによると，ノスタルジアはもともとヨーロッパで外国に駐留する兵士たちに流行する病気として認識されていた。本書では，ノスタルジアが精神病として認識されていた時代から，その歴史を丁寧に言及しており，それは，時には，祖国をこよなく愛する気持ちの表れとして見て取られることもあれば，男らしさの欠如や精神的弱さとして非難されることもあったという。

タルコフスキーの映画『ノスタルジア』も，ロシアからイタリアにやってきた男が抱く郷愁がテーマだ。イタリアで亡命生活をする彼の目の前に故郷ロシアの家屋が現れる。実は，彼はロシアでも居場所を見つけることができなかったのだが，それにもかかわらず，外国に来て故郷ロシアにノスタルジアを感じる。ここで，現実のロシアとノスタルジアの対象としてのロシアは完全には一致しない。現実の故郷がある種の憧れとともにイメージされ，ノスタルジアに昇華されると，それはただの場所の記憶ではない。そのことをぴったり言い表してくれるのが，ノスタルジーにはユートピアもしくはアンチユートピアの要素があるというボイムの見解で，これが本書の前提といえる。

本書は，第一部『心の憂鬱症：ノスタルジアと歴史と記憶』，第二部『都市と再発明された伝統』，第三部『亡命と想像の故郷』という見出しが示すとおり，ノスタルジアを三つの視点で論じている。

まず，第一部では上でも述べたように，「ノスタルジア」という概念を歴史的に紐解いてみせ，そこには「復興的ノスタルジア」と「反射的ノスタルジア」の二つのカテゴリーがあるという。「復興的ノスタルジア」は失った故郷を再建し過去につぎをあてようとするが，「反射的ノスタルジア」は痛みや憧れ，喪失にとどまる。

「復興的ノスタルジア」は時に神話まで作り出すという例の一つに『ジュラシック・パー

ク』が挙げられている。これまでの代表的著作『感嘆符のなかの死 Death in Quotation Marks』や『共通の場所 Common Places』の中でもボイムは，たびたび「キッチュ（まがいもの。本来の使用目的から外れた使い方をされるもの）」という言葉をキーワードにして大衆文化を論じることを得意としてきたが，ここでもノスタルジアと大衆文化をからませて，やはり「キッチュ」を鍵に実にユニークなアメリカ文化論を展開している。大まかに紹介すると，ノスタルジアは過去があってこそ感じられるものだから，歴史をもつヨーロッパ人は御伽噺や伝説にノスタルジアを感じるが，それに比べて歴史の浅い（ほぼ無きに等しい）アメリカ人にはノスタルジアの対象がない。そこで，かれらアメリカ人は，最新のテクノロジーを駆使して，誰も体験していない前史時代からノスタルジアの対象を新たに創り出した。その「テクノ・ノスタルジア」の対象こそが『ジュラシック・パーク』の恐竜であり，いまやこれを世界中にむけて共通の新たなノスタルジアの対象として輸出しているという。

ノスタルジアと都市の問題を扱った第二部では，一般論のみならず，具体的にモスクワやサンクト・ペテルブルグ，ベルリンを例に挙げ個別に論じているが，これらの具体的な都市に関してはボイム自身の体験したエピソードがふんだんに盛り込まれている。実際に滞在したときのエピソードや，学生時代にツアーガイドとしてサンクト・ペテルブルグ（当時のレニングラード）をガイドした思い出などをまじえて書き進められていて，読み物としても大変面白い。ちなみにハーバード大学のスラヴ文学・比較文学の教授であるスヴェトラーナ・ボイムは，同時に作家でもあって，昨年秋には初の小説『ニーノチカ』を発表している。彼女の文化論の著書は，重厚な研究書というよりは，研究とエッセイの間を軽やかに行き来しつつ読者に読ませる形式が多い。その点，本書もまた彼女らしい研究書と言える。

第二部を読み進めていくと，「最近の都市で起こっているリニューアルはもはや未来的ではなくノスタルジックであり，都市はその過去に改良を加えることでその未来をイメージしている（本書 75 頁，筆者訳）」。モスクワやペテルブルグでは，ポスト共産主義の現在，ソビエト時代に属したものはノスタルジアの領域に入り，代わってソビエト以前，つまり帝政ロシアやそれ以前の伝統の再発見に忙しいとボイムは論じている。しかし，ここでふと感じるのは，「ノスタルジア」という言葉が，もともとの「郷愁」なり「遠い故郷への思慕の念」という意味からこっそり「失ったものに対する憧れ」を表現する言葉に変わってしまっていることだ。というのも，都市それ自体はどこかへ行ってしまったわけでもなく，そこに存在しつづけているのだから。ここで失われたものは過去であって，故郷という場所ではないのだから。

ちょうど，タルコフスキーの映画がそうだったように，亡命はノスタルジアと必然的に結びつく。そこを論じるのが本書の第三部である。ウラジーミル・ナボコフ，ヨシフ・ブ

ロツキー，イリヤ・カバコフといった作家や芸術家がイメージする故郷や，一般の亡命者たちがもつ祖国の土産物のコレクションを考察している。離れた故郷を思う気持ちであるノスタルジアは，懐かしい過去と今生きている現在という二重構造がなくてはならない。亡命文学を語るとき，あたかも（過去の情景と現在の情景の）二重露出の写真に喩えられることがよくあるが（筆者が初めてこのたとえを知ったのは，Edward Brown の論文《The Exile Experience》だった），ボイムの考えるノスタルジアも基本的にはこの構造を継承している。

結局のところ，ノスタルジアは，故郷と亡命地という空間的なパースペクティヴと，過去と現在という時間的パースペクティヴをもっている。第二部の都市論はもっぱらある場所における過去と現在という時間軸でノスタルジアを語っていたが，第三部の亡命論では時間と空間をそれぞれ縦軸と横軸にしてノスタルジアはより広範な領域を守備範囲としている。本書はノスタルジアという切り口で，ポスト共産主義のさまざまな文化を論じてきたが，あちらこちらに「ノスタルジア」を当てはめるあまり，「郷愁」という狭義の意味から，かなりの程度「喪失感」や「追憶」といった意味にまでノスタルジアが膨張してしまった感も否めない。しかし，エッセイの要素をちりばめながら，ここ数年の社会文化の動きを的確に把握してリアルタイムで論じてみせるところなど，ボイムらしい魅力的な一冊といえるだろう。